

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和3年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第9号（12月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401

南さつま市金峰町大野 2200

TEL 099-245-1081 (代表)

099-245-1157 (直通)

099-245-1149 (FAX)

テレホンサービス

鹿児島 099-296-6430

296-6431

ホームページアドレス：<http://www.jpnp.ne.jp/kagoshima>

メールアドレス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp



農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理, 安全使用
2. 作物に対する安全 適期, 適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給
(農薬安全使用基準の遵守)
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止
(周辺住民等への危被害防止)
(河川, 湖沼, 海などへの汚染防止)
(養蚕, 養蜂などへの危被害防止)
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

農薬ラベルを確認しましょう

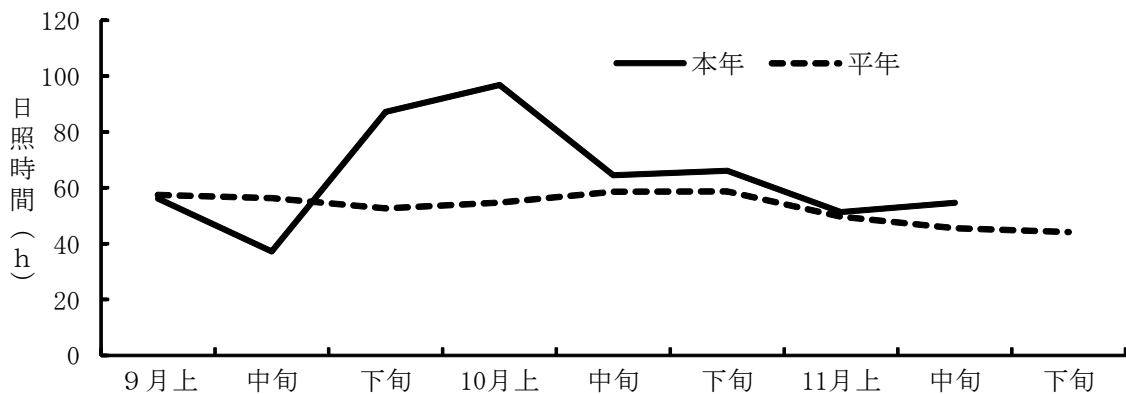
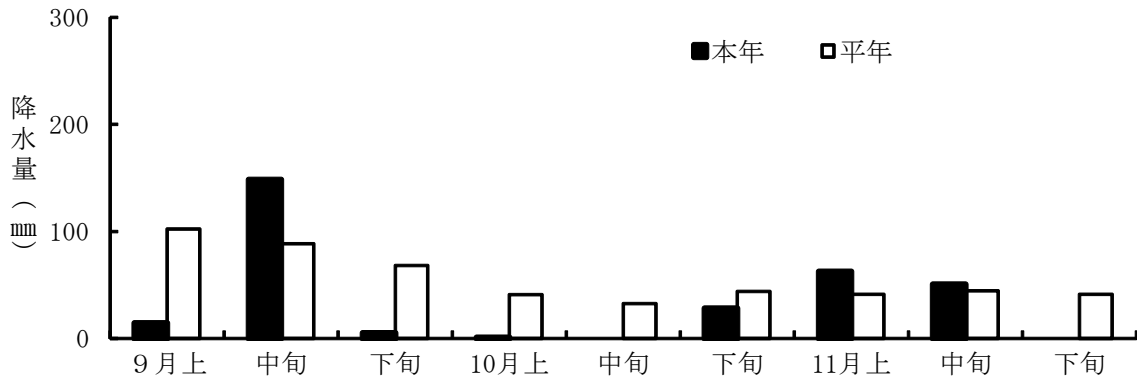
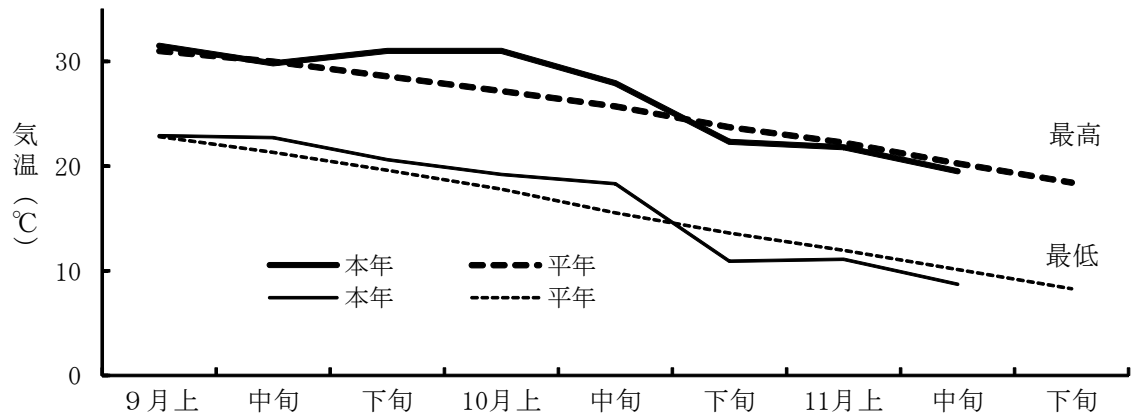
農薬の飛散(ドリフト)にも注意しましょう

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（11月27日から12月26日） 令和3年11月25日 鹿児島地方气象台 発表

要素	地域	確率（％）			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	50	30	20	九州南部では、気温は平年より低く、降水量は平年より少なく、日照時間は平年並み。奄美地方では、気温は平年より低く、降水量は平年より少なく、日照時間は平年並みか少ない見込み。
	奄美地方	50	40	10	
降水量	九州南部	50	30	20	
	奄美地方	50	30	20	
日照時間	九州南部	30	30	40	
	奄美地方	40	40	20	

II. 9～11月の気象情報（鹿児島地方气象台 観測点：加世田）



【病害虫発生予報の概要】

作物		病害虫名	発生量	
			現況	予報
野菜	キュウリ	退緑黄化病	並	並
	ピーマン	斑点病	並	並
		うどんこ病	やや多	やや多
		アザミウマ類	やや多	やや多
	イチゴ	うどんこ病	並	並
		アザミウマ類	並	並
		ハダニ類	並	並
	施設野菜共通	コナジラミ類	並	並
	キャベツ	菌核病	やや少	やや少
		コナガ	少	少
エンドウ類	褐紋病・褐斑病	並	やや少	
	アザミウマ類	並	並	
花き	キク	アザミウマ類（県本土，施設）	並	並
		”（奄美地域，露地）	少	少
		ハダニ類（県本土，施設）	やや多	やや多

【 病 害 虫 発 生 予 報 】

I. 野 菜

1. キュウリ

(1) 退緑黄化病

ア 予報内容

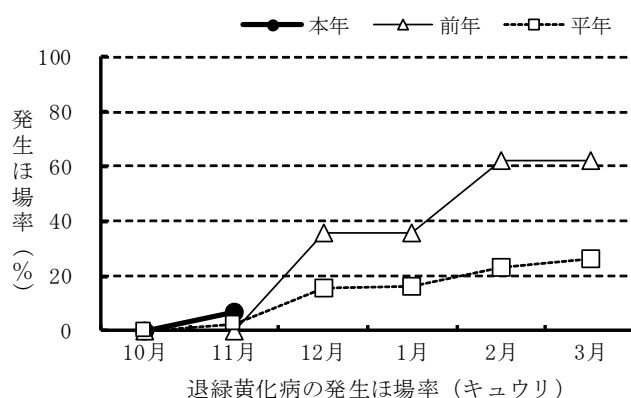
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率7%（平年3%）：並
コナジラミ類の
発生ほ場率7%（平年15%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 退緑黄化病の病原ウイルスはタバココナジラミが媒介するので、ハウス開口部（サイド等）等に黄色粘着トラップを設置し早期発見，早期防除に努める。
- (イ) 発病株を認めたら速やかに除去し，ハウス外に持ち出して埋没処分するか，ビニール袋等に入れて処分する。
- (ウ) 発病後は発生拡大を防ぐため，タバココナジラミの密度を抑えるように薬剤防除を行う。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け，作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



2. ピーマン

(1) 斑点病

ア 予報内容

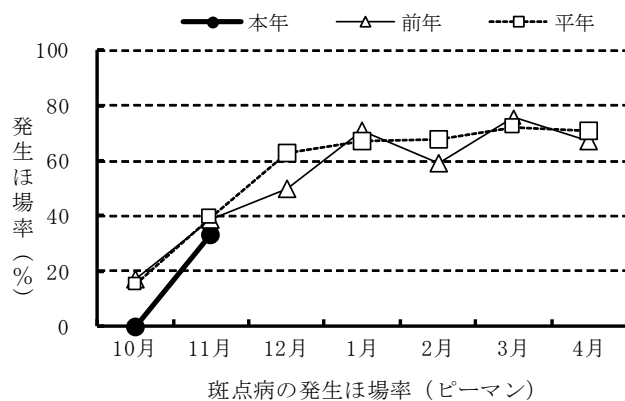
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率33%（平年39%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 多湿条件下で発生しやすいので，ハウス内の通風換気に努める。
- (イ) 発病葉はできるだけ持ち出して処分し，菌密度の低下を図る。
- (ウ) 成り疲れなどによる草勢低下により発生しやすいので，適正な肥培管理に努める。
- (エ) 多発すると防除が困難になるので，初期防除に努める。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け，作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(2) うどんこ病

ア 予報内容

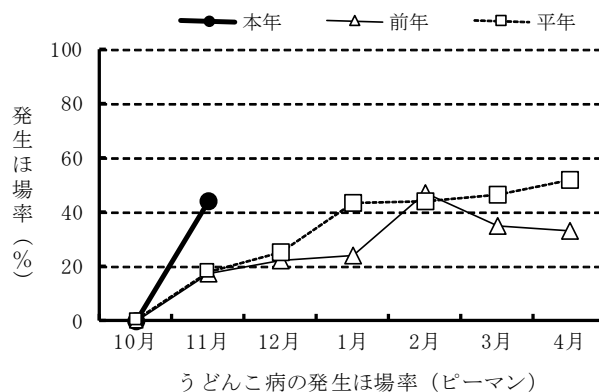
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率44%（平年18%）：高い（+）
発生程度は低い（-）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 成り疲れ等による草勢低下により発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。
- (イ) 発病葉は早めに除去し、施設から持ち出して処分する。
- (ウ) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(3) アザミウマ類

ア 予報内容

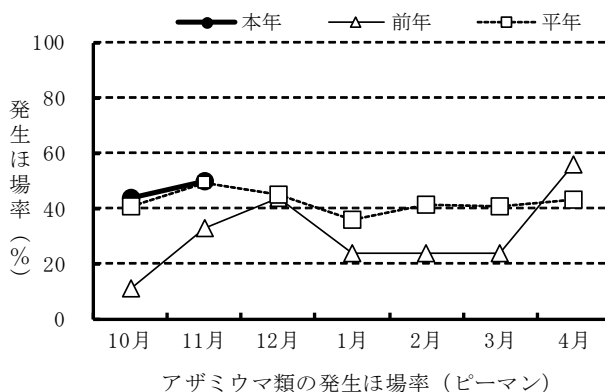
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率50%（平年49%）：並
発生程度の高いほ場を認めた（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) ピーマン黄化えそ病の病原ウイルスを媒介する。ハウス開口部（サイド等）等に粘着トラップを設置し、早期発見と早期防除に努める。
- (イ) 本虫は花や新芽の中など薬剤のかかりにくい場所に生息するので、薬剤散布は丁寧に行う。
- (ウ) カブリダニ類などの天敵を放飼しているほ場では、天敵に影響のない薬剤を選択する。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。



3. イチゴ

(1) うどんこ病

ア 予報内容

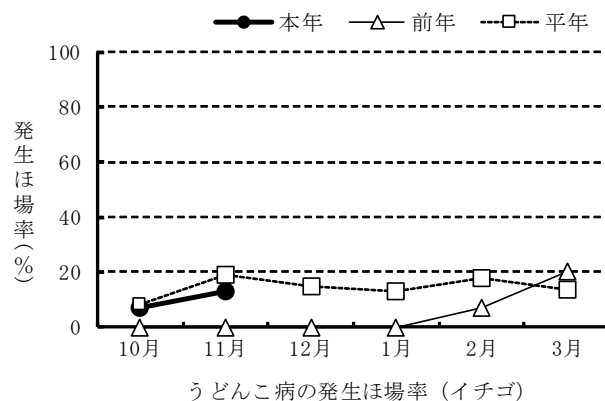
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率13%（平年19%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 本病が発生しやすい葉裏をよく観察し、早期発見と初期防除に努める。
- (イ) 発病果及び発病葉や古葉は除去し、ほ場外へ持ち出して処分する。
- (ウ) 葉裏や下位葉に薬剤が十分かかるよう散布する。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、系統や作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(2) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率20%（平年23%）：並

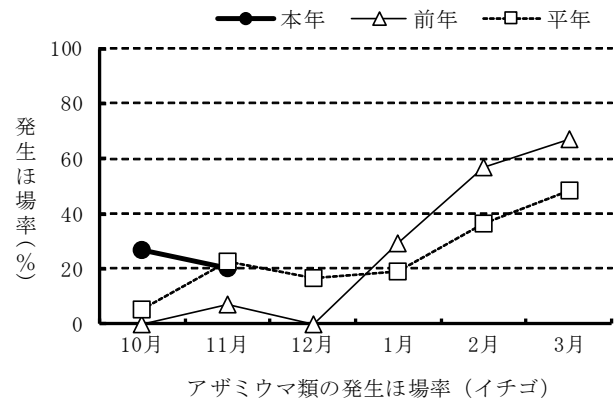
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) ハウス開口部（サイド等）等に粘着トラップを設置し、早期発見と早期防除に努める。

(イ) 本虫は花や新芽の中など薬剤のかかりにくい場所に生息するので、薬剤散布は丁寧に行う。

(ウ) カブリダニ類などの天敵を放飼しているほ場では、天敵に影響のない薬剤を選択する。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。



(3) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率40%（平年45%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

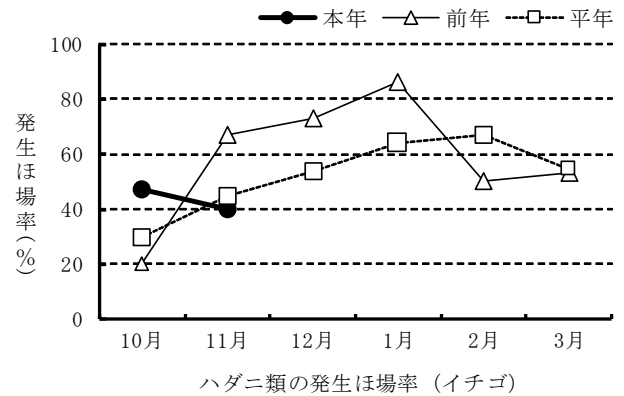
(ア) 薬剤の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから葉裏にかかるよう散布する。

(イ) 薬剤によっては感受性が低下しているので、散布後は防除効果を確認する。

(ウ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。

(エ) カブリダニ類を天敵に用いる場合は、天敵への影響を考慮した体系防除を行う。

(オ) 薬剤によっては、ミツバチに影響があるので薬剤選定に注意する。



4. 施設野菜共通

(1) コナジラミ類

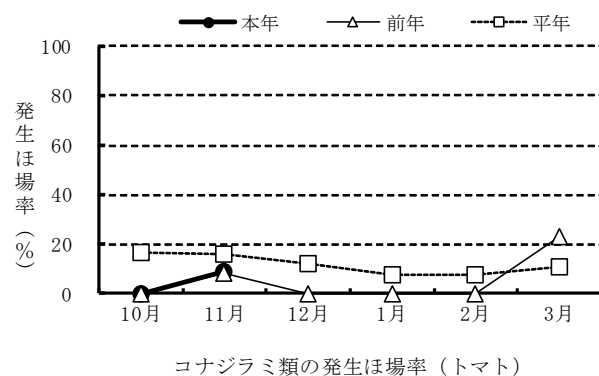
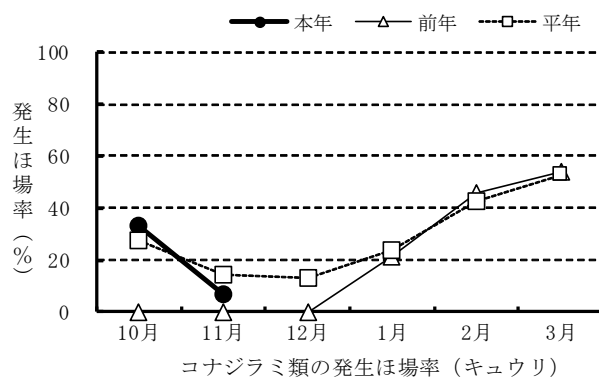
ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
 (イ) 対象作物 キュウリ、メロン、トマト
 ミニトマト、ピーマン
 イチゴ、サヤインゲン
 (ウ) 発生量 並
 イ 予報の根拠
 (ア) 調査結果 発生量：並

作物名	発生ほ場率 (%)		概 評
	本年	平年	
キュウリ	7	15	並
ト マ ト	9	16	やや少
ピーマン	67	51	やや多
イチゴ	20	17	並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) キュウリやメロンにウリ類退緑黄化病、
 トマトやミニトマトにトマト黄化葉巻病等
 の病原ウイルスを媒介する。生育初期にこれらのウイルス病が発生すると被害が大きくなる
 ので、以下の点に注意して総合的な防除対策に努める。
- ・黄色粘着トラップを設置して早期発見・早期防除に努める。
 - ・発病株は伝染源になるので、疑わしい株も含め、見つけしだい除去し、ハウス外に持ち出
 して埋没処分するか、ビニール袋等に入れて処分する。
- (イ) サヤインゲンでは莢に白化症を、トマト、ミニトマトでは着色異常果を生じる恐れがある
 ので、早めに防除する。
- (ウ) 天敵を放飼するほ場では、放飼前の密度がその後の防除効果に影響するため、防除を徹底
 する。導入後は天敵への影響を考慮した体系防除を行う。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。



5. キャベツ

(1) 菌核病

ア 予報内容

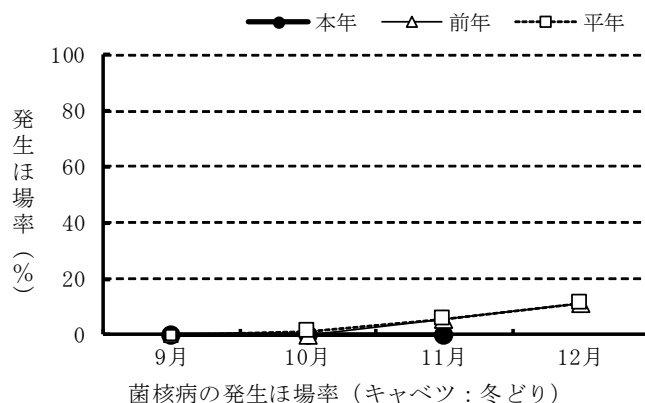
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 冬どり
- (ウ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少
発生ほ場率0%（平年5%）
：やや低い（-）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 冷涼・多湿条件で発生しやすいので、天候に注意し、予防散布に努める。
- (イ) 病原菌は地際部から感染しやすいので、薬剤は株元へ十分かかるように散布する。
- (ウ) 発病部位から健全部へ菌糸によって被害が広がるので、発病葉は見つけ次第取り除く。
- (エ) 発病株は周辺株や次作の伝染源となるので、菌核を生じないうちにほ場外に持ち出し処分する。
- (オ) 収穫終了後の残渣は適正に処分する。特に発病残渣をほ場に残さない。



(2) コナガ

ア 予報内容

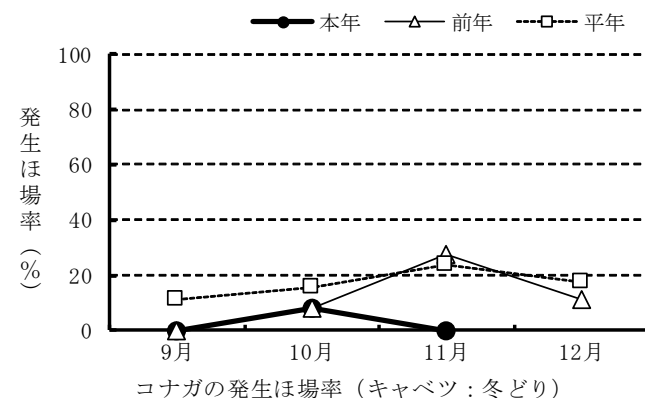
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 冬どり・春どり
- (ウ) 発生量 少

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：少
発生ほ場率0%（平年24%）：低い（-）
- (イ) 気象予報
気温：低い（-）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 冬どり作型では品質低下を抑えるために、結球前の防除を徹底する。
- (イ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用機作の異なる薬剤のローテーション散布を行う。
- (ウ) 収穫終了後の茎葉は、次の作型への発生源になるので、速やかにすき込むみ処分する。
- (エ) 冬どり作型で発生が多い地域では、春どり作型に被害が出やすいので、育苗期～定植時の薬剤処理を始め、春どりキャベツの初期防除に努める。



6. エンドウ類

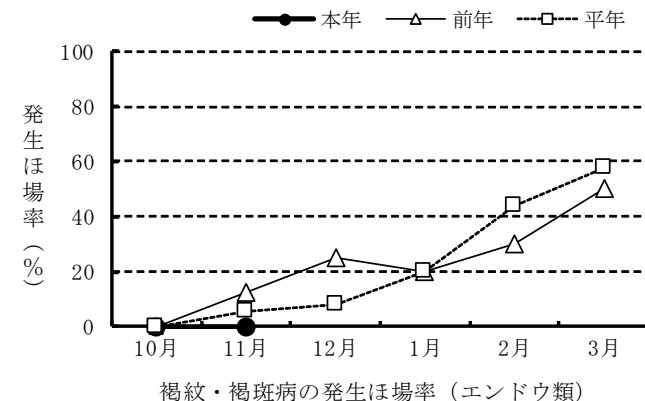
(1) 褐紋病・褐斑病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 冬どり
- (ウ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率0%（平年5%）：並



(イ) 気象予報

気温：低い（－）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 排水不良のほ場では多発しやすいので、排水対策に努める。

(イ) 多発するとごま症の発生につながる。早期発見に努め、発生を認めたら直ちに防除を行う。

(2) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 対象作型 冬どり

(ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 38%（平年47%）

：やや低い（－）

発生程度の高いほ場を認めた（＋）

(イ) 気象予報

気温：低い（－）

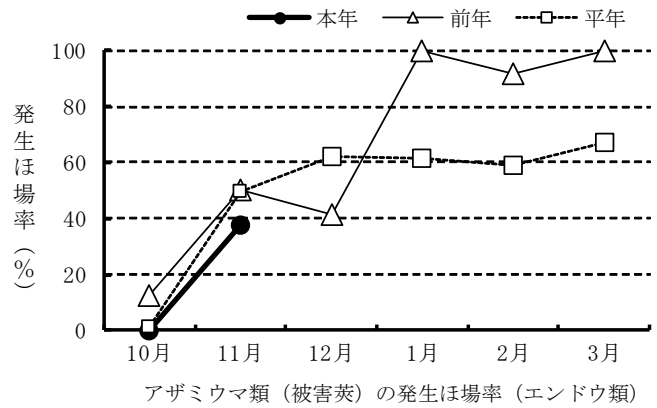
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 主な発生種はハナアザミウマである。

(イ) アザミウマ類は若莢に産卵し、「白ぶくれ莢」となるので、若莢の被害や粘着トラップへの誘殺等から発生状況を把握し、早期防除に努める。

(ウ) 花卉の奥に生息するため、丁寧な薬剤散布に努める。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



防除に関する今月の留意事項

1. マメ類のウラナミシジミ

成虫と卵が多くみられ、被害の拡大に注意が必要である。幼虫は莢の中に入り、子実を食害する。そのため、成虫がみられる産卵からふ化直後までの薬剤防除が重要である。防除の遅れによって被害が拡大しないように、以下の点を考慮して防除対策に努める。

(1) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

2. エンドウ類のごま症対策

スナップエンドウの「ごま症」はうどんこ病菌及び褐紋病菌が影響して引き起こされる。うどんこ病は例年11月末から12月にかけて初発が認められ、本年も11月の調査で発生が認められている。うどんこ病は1段目の収穫時期からみられやすいので、防除の遅れ・被害拡大とならないように、以下の点を考慮して防除対策に努める。

(1) 未発生ほ場では早期発見に努め、既に発生しているほ場では早めに防除を行う。

(2) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

3. ソラマメのアザミウマ類

アザミウマ類は、花卉の奥に寄生し見つけづらいことから、防除の遅れ・被害拡大とならないように、以下の点を考慮して防除対策に努める。

(1) ほ場周辺のセイタカアワダチソウやセンダングサ等の雑草は発生源となるので除草する。

(2) 青色粘着トラップ等を活用し発生状況を把握し、定期的な防除に努める。

(3) 花卉の奥に生息するため、丁寧な薬剤散布に努める。

Ⅱ. 花き（キク）

（1）アザミウマ類

ア 予報内容

（ア）発生地域 県内全域

（イ）発生量

県本土（施設） 並

奄美地域（露地） 少

イ 予報の根拠

< 県本土（施設） >

（ア）調査結果 発生量：並

発生ほ場率40%（平成35%）：並

< 奄美地域（露地） >

（ア）調査結果 発生量：少

発生ほ場率20%（平成76%）：低い（-）

（イ）気象予報

気温：低い（-）

ウ 防除上注意すべき事項

（ア）ミカンキイロアザミウマ等一部のアザ

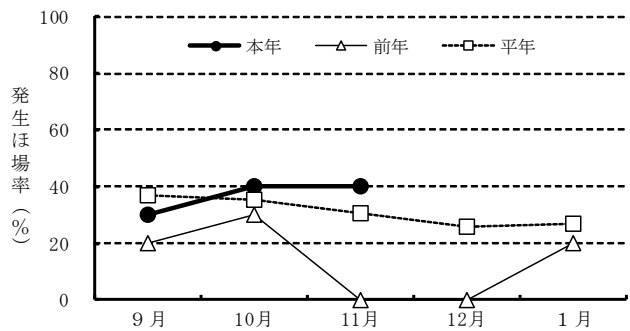
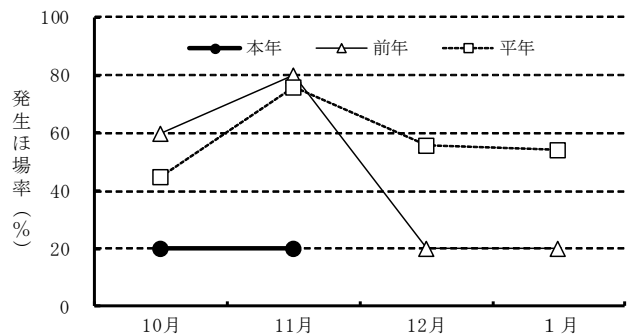
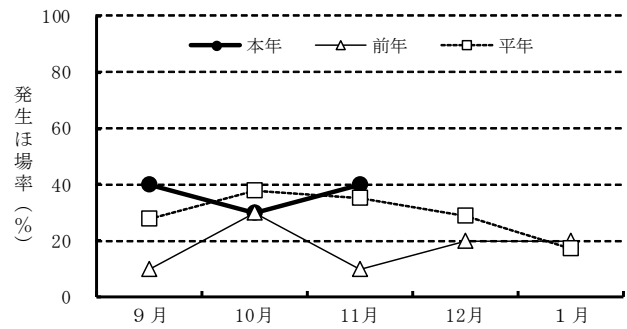
ミウマ類はキクえそ病（TSWV）とキク茎えそ病（CSNV）を媒介するので、ほ場への侵入防止と早期発見及び早期防除に努める。

（イ）発生動向を把握するためには、出入口付近等に青色粘着シートを設置する。

（ウ）アザミウマ類は、種によって薬剤に対する感受性が異なるので、薬剤の選定に注意する。

（エ）同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

（オ）ミカンキイロアザミウマは上位葉にクロゲハナアザミウマは中下位葉に寄生しているため、薬剤は株全体にかかるよう丁寧に散布する。



（2）ハダニ類

ア 予報内容

（ア）発生地域 県本土（施設）

（イ）発生量 やや多

イ 予報の根拠

（ア）調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率40%（平成30%）

：やや高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

（ア）出入口や前作での発生場所近く等でスポット状に発生するケースが多いので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と早期防除に努める。

（イ）薬剤は葉裏までよくかかるように散布する。

（ウ）同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

（エ）ほ場内と周辺の雑草や収穫後の残さ等は早めに除去し、適正に処分する。

Ⅲ. 果 樹

防除に関する今月の留意事項

【カンキツ】

1. ミカンハダニ

11月の調査では、ミカンハダニの発生が多いほ場が散見された。特に発生密度が高いほ場では、収穫後の果実を加害する恐れがあるので、薬剤の収穫前日数に注意して防除する。

2. 貯蔵病害（青かび病，緑かび病，軸腐病）

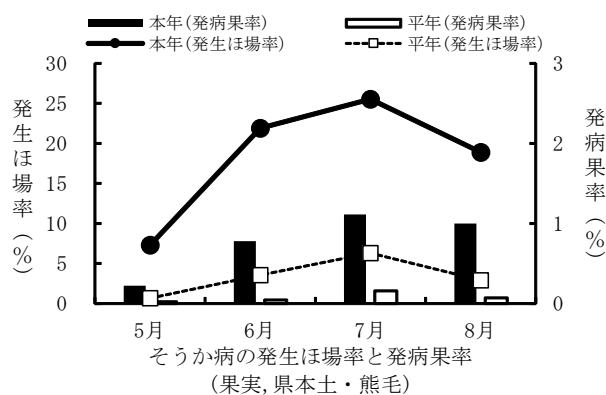
収穫時の気温が高く降雨が多いと腐敗果が発生しやすい。なお、軸腐病の病原菌は黒点病と同じ菌であるため、黒点病の発生が多いほ場では注意する。

- (1) 貯蔵を要する普通温州や中晩柑類は収穫前に必ず防除する。
- (2) 防除薬剤は使用基準を厳守し、収穫予定日を想定し、収穫前日数に注意して選定する。
- (3) 収穫時には果実に傷をつけないように手袋を使用し、果梗部の二度切りは丁寧に行う。

3. そうか病

5月～8月の調査では、そうか病（果実）の発生が平年より多かった。今年度発生があった園では、下記の対策を実施する。

- (1) せん定時には発病葉の除去を徹底し、越冬病斑量を少なくする。
- (2) 本病は雨水により伝播するため、雨滴の乾きを早くするよう、園内の通風・採光を改善する。



農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り，記載された用途，方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて，適切な防除衣，保護具（マスク・手袋など）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. **散布時には薬剤がほ場の外に飛散したり，流出したりしないよう十分注意する。**
6. **クロルピクリン剤は，住宅地および畜舎に隣接するほ場や，無風の時，土壤が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。**
7. ランネート剤は毒性が強いので，施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬，不要になった農薬および使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し，鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は，前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は，各作物での発生量やトラップ調査結果等を総合的に基づいた総合評価。
- 発生ほ場率と調査場所を記載しない発生数・発生率は，巡回調査の結果。
- 果樹と茶樹の定点防除園又は無防除園は，果樹部と茶業部での調査結果。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（＋），（－）は，発生量の増加，減少要因を示す。
- 気象予報は，向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平年を用い，本年調査値の後に（平年〇〇）で表記する。ただし，過去3年間の平均値を用いた場合は（過去3年〇〇）と表記する。